

看護人類学入門

Introduction to Nursing Anthropology

感染症の隠喩 (10章)

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
Center for the Study of Communication-Design, CSCD
池田 光穂
IKEDA Mitsuho



感染症の隠喩

『Z』 (C. コスタ=ガヴラス監督, 1969年)

- フランスの俳優イヴ・モンタン扮する民主運動のリーダーZ氏が危険を冒して政治集会に臨み、右翼の暴漢に殴打され死亡します。民主的運動を抑圧する軍事政権の暴力のメカニズムをドキュメンタリータッチで描いたものですが、映画の中には登場人物に関する挿話がパッチワークされており、複雑な人間模様をみることができます。物語の後半は、民族楽器を使った音楽をバックにさらにテンポのよい映像が続いていきます。未来を約束された法律エリートである予審判事が、ちょっと怪しいカメラマンの助けを借りながら当局の隠蔽工作に屈することなく事件の真相究明を行い、ついには軍事政権の上層部の逮捕までにいたるといった痛快な物語展開を遂げます。ヒーローの予審判事が迎える結末はまだ観賞されていない読者の楽しみにするために、ここでは沈黙

軍事政権のまがまがしさ

- この映画の冒頭では、軍事政権の農務次官が、農作物のぶどうの病害ベト病（糸状菌の寄生による）の猛威について語り、〈病害=ばい菌〉の防御について疫学に基づくボルドー薬剤液の散布のキャンペーンの説明から始まります。続いて憲兵隊司令官がその説明を受けて今度は〈思想の病害〉の駆除も同じ論理で行うべきだと熱弁を振ります。このシーンは抑圧的権力のまがまがしさを伝えて、筆者は冒頭の見事な映像だと感じる瞬間でもありません。ちなみにこの時期の〈思想の病害〉とは、冷戦期における共産主義思想を指していると思われます。軍事政権の側からみると、自らの思想弾圧のやり方を表現するには、作物にはびこる〈ばい菌〉を制圧せよという喩えがぴったり

隠喩から逃れることはできぬ

- 隠喩という想像力を抜きにしては生きてはいけない。感染症にまつわる様々な社会的現象においても隠喩の力が作用していると言ってもよい。隠喩は人間の創造力の源泉であると同時に、私たちの思考の範囲を限界づけ、それ以上、自由に観念を使わせないようにする呪縛の原因にもなる。

隠喩とは何か？

- 隠喩とはなんでしょう。事物としてはお互いに相互に関係がなくても、それらがある意味の体系の中における意味づけが類似しているとき、それらを隠喩関係にあるといいます。たとえば、王様の隠喩表現としてライオンが使われるとき、それは人間の王と動物の王の類似性を指し示しているわけです

換喩とはなにか？

- 隠喩と似たものにメトミニー（換喩＝かんゆ）という言葉があります。隠喩でいう王とライオンは同じものではありません。しかし王の権威の象徴たる王冠や杖のように身体の部分であったり延長上に位置づけられるものはどうでしょうか。王様のことを言う代わりに、王様が身につけているもの（すなわち部分）をもって王様を表現することを、ここではメトミニー（換喩）と言います。

7

提喩＝シネクドキ

- 表現するものと、表現されるものの関係が、包含、発展（成長）あるいは変化の関係で示されるものがあります。大きな玄関はただ単に屋敷の一部として表現されますが、大きな屋敷に住む豊かな家族の成功と繁栄という成長の結果を意味することがあります。このような表現はシネクドキ（提喩）の関係にある言います

8

隠喩／換喩／提喩のおさらい

- 事物としてはお互いに相互に関係がなくても、それらがある意味の体系の中における意味づけが類似しているとき、それらを隠喩（メタファー）関係にあると言います。たとえば、王様の隠喩表現としてライオンが使われるとき、それは人間の王と動物の王の類似性を指し示しているわけです。隠喩と似たものにメトミニー（換喩）という言葉があります。隠喩でいう王とライオンは同じものではありません。しかし王の権威の象徴たる王冠や杖のように身体の部分であったり延長上に位置づけられるものはどうでしょうか。王様のことを言う代わりに、王様が身につけているもの（すなわち部分）をもって王様を表現することを、ここではメトミニー（換喩）と言います。さらに、隠喩と換喩のほかに、表現するものと、表現されるものの関係が、包含、発展（成長）あるいは変化の関係で示されるものがあります。大きな玄関はただ単に屋敷の一部として表現されますが、大きな屋敷に住む豊かな家族の成功と繁栄という成長の結果を意味することがあります。このような表現はシネクドキ（提喩）の関係にあると言います。

9

隠喩から逃れることはできぬ

- 隠喩という想像力を抜きにしては生きてはいけない。感染症にまつわる様々な社会的現象においても隠喩の力が作用していると言ってもよい。隠喩は人間の創造力の源泉であると同時に、私たちの思考の範囲を限界づけ、それ以上、自由に観念を使わせないようにする呪縛の原因にもなる。

10

隠喩の呪縛からの解放

- 隠喩の呪縛から解放されるためには、（1）隠喩から自由になる、（2）自らも隠喩を駆使しながらも隠喩の作用につねに自覚的になる、という2つの処方箋が考えられます。筆者の立場は、隠喩から自由になれるという幻想をもつことを放棄しながらも、希望を捨てずに（2）の立場をとるものです。

11

『隠喩としての病い』

- 欧米社会においては、その時代を規定した典型的な病いというものがあることを豊かな例をもって主張しました。そして時代を規定する病いは、主に隠喩として機能する意味があったということを彼女は示しています。病気の隠喩とは、病気がどのような経過をたどるのかという観察の事実が、その時代の治療法などとの関連の中で、人びとの社会的想像力による変換の結果、ステレオタイプとして固定化してしまうことを示しています。しかし、それは時代や社会によって変化します。ソナグによる病いの隠喩はなによりも治療法の確立により、その意味を大きく変質させてゆくという点でとてもダイナミックであると言います。

12

『フレキシビリティ：ポリオの日々からエイズの時代までのアメリカ文化における免疫性の役割』

- ・エミリー・マーチン『フレキシビリティ：ポリオの日々からエイズの時代までのアメリカ文化における免疫性の役割』1994年の著作
- ・1950年代以降のアメリカ合衆国における免疫概念が、どのような大衆化を遂げたかについて、専門家ならびに非専門家へのインタビュー調査、科学的読み物の分析等を駆使して明らかにしている

13

『フレキシビリティ』

- ・エミリー・マーチンは『フレキシビリティ：ポリオの日々からエイズの時代までのアメリカ文化における免疫性の役割』1994年という興味深い著作において、1950年代以降のアメリカ合衆国における免疫概念が、どのような大衆化を遂げたかについて、専門家ならびに非専門家へのインタビュー調査、科学的読み物の分析等を駆使して明らかにしています【マーチン 1996】。著作のタイトルにあるように、フレキシブル=柔軟な身体とは、現代の北アメリカにおける身体のあり方を表現するものです。それは、外部から要請された身体のあり方についての隠喩的表現であると同時に、人々が受容しつつある身体の表象です。

14

免疫の隠喩

- ・免疫の隠喩は、個々人の身体の外部へも伸展してゆく隠喩でもあります。ちょうど会社組織が雇用者調整をして、不確実な経済環境を生き残ったり、解雇された労働者が次の雇用機会を生かしたりしていけるように、「柔軟な身体=フレキシブル・ボディ」という一種の身体観あるいは世界観は、私たちに現代社会で生き残るための可能性をあたえてくれます。組織なしには給料を稼げない私たちをかえって弱い存在に過ぎないと思こませるという可能性も同時にあります。柔軟な身体のあり方は、別の局面では柔軟ではない古典的な、それまでの疾病観や健康観への挑戦にもなります。私たちは最新の免疫理論からヒントを得て、病原を完全に駆逐するという不可能な理想を抱くよりも、(予防注射やカウンセリング、あるいは個々人の資格取得などの)自己の免疫力をつけて、いかに上手に病気に軽く罹るのかということが重要であることを学びます。

15

アントノフキー仮説

- ・米国のユダヤ系の医療社会学者アロン・アントノフスキー(1923~1994)が提唱した、人間健康維持(あるいは健康回復)に関する仮説(アントノフスキー仮説):アントノフスキー[2001]は、健康達成ないしは回復には、(1)健康を生み出す社会における身体的メカニズムと、個々人の主体のなかに(2)身体統一感(Sence of Coherence; SOC)が不可欠であるとし、前者すなわち、健康を生み出す社会における身体的メカニズムは、サルートジェネシすなわち健康の生成論という考え方で、健康を維持できる個人と社会がわかれている状況のなかに健康を支配する要因すなわち衛生的要因(sanitary factors)があり、それらがうまく働くことが重要であるとし、また、後者すなわち身体統一感が不可欠であるという考え方は、健康を増強するような強さは主体がもつさまざまな身体的社会的要素の結合力(ないしは首尾一貫性)が十全であることを示したものであり、尺度化可能なものとされています。

16

アントノフキー仮説の可能性と限界

- ・アントノフスキーがいくつかの書物を通して、このような仮説(理論)に到達したのは、彼自身のユダヤ人同胞に対する第二次大戦中ないしは戦後のシオニズム国家のなかで、生存条件の危機的な状況に遭遇しても「健全」な身体と精神をもつ同胞がいたことに対する経験からきています。健康が人間にとって非常にダイナミックな実体であるということを指摘した点ならびに、健康達成を個人的な到達ではなく社会との関係のなかで考えたことは重要な指摘です。他方、医療化により、個人の主体感覚や医療行動が変容することや、その理論自体もやがて一種の健康主義化することなどを予言できなかった点で、理論的には仮説のままにとどまっており、明らかに欠陥のある仮説です。

17

軍事化する公衆衛生

- ・学問としての公衆衛生学は(新しく登場した感染症)により再び社会的活力を取り戻しています。あるいは新たな活力を得つつあると言ってもよいでしょう。感染症と闘うことは、人びとの福利と世界の平和に貢献するからです。新型インフルエンザに関する政府や自治体の広報、あるいは細菌戦争の模擬演習などについては、近年ではよくマスメディアでの紹介で読者もご存じでしょう。異教徒の聖戦については私たちになかなか理解が困難ですが、他方で、生物医学的(聖戦)の概念に関しては、私たちは誰も疑うこともせず、日常生活に少くも定着しつつあります。もちろん、この聖戦は世界での同じ信仰を有する同志たちのネットワークのおかげで、国際的な協調を呼びかける社会効果を生み出した。と同時に、HIV感染患者の自助グループの形成や政府の救済措置への政治的な動きなど地域社会においても、さまざまな世界再編の機会をもたらしています。そこで重要になることは、この種の病気の隠喩の共有とそれに立ち向かう人びとの新たな組織の再編にほかなりません。

18

(1) 「人類は感染症を征圧した」という神話はすでに崩壊している

- 新しい感染症の登場と、その征圧プロセスの初期における初動ミスによる感染の拡大などのエピソードは、現代人に対して生物医学による勝利という神話への信頼感を低下させています。しかし現代人は、それに代わる有効な手段を手に入れるまでは、すでに手法が確立し、その信用もいまだ失墜していない隔離や消毒というルーティンワークを継続して行なうことを再認識しています。

19

(2) 科学的新知見に対する社会的要求度が向上しつつある

- 新しい感染症への対策は、個々の人間の認知や行動、個人や集団の感染の条件、細胞生物学レベルでの様子、遺伝子レベルでの様子に関する知見を要求します。また病気の征圧のためには、人びとは巨大なプロジェクトと膨大なコストがかかることを覚悟しているようです。あるいは国民にはそのような犠牲が払われることを予告するような広報がみられるようになってきました。

20

(3) 国際的な協調体制への公的認知が登場した

- 国際世界に通用するための迅速な対応や情報公開は新しい感染症対策には不可欠であるという認識が急速に広がりました。このトレンドは国際的な感染症対策への財源を確保したり、あるいは公正さの維持を前提にした各国の経済的負担の必要性をしつこく認めるといった社会的傾向を増加させています。

21

(4) 相互に関連する新しい統治の概念の理解が重要になる

- 社会的征圧という観点から見ると人々には、病気を征圧する過程は確率論として理解しているが、病気の危険性に晒されている人々はゲーム論（リスク論）で病気に立ち向かっているようです。つまり当事者にとって病気になる時は何パーセント罹るのではなく、罹るか罹らないかであり、何パーセント死ぬのではなく、死ぬか死なないかに関心があります。つまり罹らず死なない運命が訪れるような対処行動がとられています。

22

社会防衛論の虚妄：01

- 病気を社会的管理する人々にとっては、1人でも犠牲者が少ないほうが〈よい対策〉であり、社会防衛では〈多くの命〉と〈死にゆくある1つの命〉が秤に懸けられ、前者が優先されるように思われます。つまり病気を理解し、病気に対して適切に対処する基準は、管理される当事者と管理する為政者（公衆衛生学者も含まれる）とでは180度その方向性が異なるという事実があります。

23

社会防衛論の虚妄：02

- 流行病の管理対策において市民に対して情報公開を優先する考え方の登場は、もはや社会防衛の論理は万能のツールではありません。使い次第では管理権力そのものに息を止めてしまうような事態を生んでいます。このような現象は、何をもって病気を征圧管理しているのかという意識の違いを明らかにするだけでなく、それらを調停するような病気征圧の論理すなわち社会に関する統治の概念を変更させます【フーコー 2007】。

24